

# 優秀賞

宮城県

美里町立不動堂中学校 三年

小野 莉 穂

## わたしたちの地域を守る消防団

雨が地面をたたきつけ、風が木々を揺らし外を見ると、「これから不安な夜を過ごすのか。」と母、祖母と話し父の帰りを待つ。父が帰って来るとそういう日は、大好きなビールを飲まず心配そうに窓から外を見ている。私の父は消防団員だ。普段は会社員として普通に働いている。仕事も忙しいようで、帰って来た時は、「疲れたあ」と言っておビールを飲みテレビを見ながら、「今日、学校どうだった？」「勉強した？」と聞いてくる。決まって私は、「学校は普通。勉強はした。」と答える。するとそこから、「普通って何だ！」と始まり面倒くさくなるから部屋に行く。ブツブツ言う声が後ろから聞こえてくる。それが日常の父との会話であり姿である。はっきり言って全然かっこよくない。しかし、そんな父をカッコいいと見直すことが時々ある。それは、消防団員として地域のために一生懸命働いている時だ。そんな時の父の姿は、いつもと違って、りりしく家中とは違う顔を見る事ができる。

父は消防団の一員としての誇りを持ち、地域のために働いている。大雨が降ればマンホールから水が溢れていないか確認に行き、台風が近づけば土のうの準備、火災が発生すれば消火に行く。日中仕事をし、帰って来てから休みたいはずなのに、呼び出されるとサッ

と消防団員の服に着替えて出て行く。

六年前の東日本大震災の時もそうだった。町の姿が変わり、地域の人たちの不安な顔。余震に怯え、どうしていいか分からなくなる程のパニック。そんな時も、お年寄りの家や避難所を回ったり、物資を配ったりして、話を聞いてあげた。自分の家の事よりも地域のために活動していた。余震も落ち着き少しずつ日常を取り戻したある日、「あの時はお世話になったね。ありがとう。」と道行く私にお礼を言ってくれたおばあちゃん。その笑顔に私も思わず笑顔になった。

地域を守るために精一杯の活動をしている消防団は、コミュニケーションの愛の形なのだろうか。そこに住む人々を愛し、ふるさとの自然を愛し、これからの未来につないでいく。

私の住む町は、そんな愛に溢れている。こんな暖かな雰囲気のあるさどが、私は大好きだ。私たちを守ってくれる消防団は町の誇りだ。私もふるさとを守り、人々を助けられる大人になりたい。

最後に、東日本大震災ではたくさんの方々が命を落としました。逃げることもより地域の人々の命を守った事を後で知った。私は、消防団員として出て行く父を見送る時、背中に語りかけている。「どうか無事に帰って来て。」と。

